

# 人類進化生物学：経済からの素描

久松 佳彰

## [要旨]

経済において進化や心理を考えることは重要になっている。経済史を考える上で進化を無視することはできない。そこでは文化と遺伝子の共進化は重要な概念である。また、経済において心理を考えることは重要になっている。例えば、グローバリゼーションへの不満は心理的側面である。行動経済学は経済学と心理学の関連分野である。ビジネスにおいても心理を考えることは重要である。しかし、これらの諸問題は並置されており有機的に統合して示されることが重要である。その役割を果たすのが人類進化生物学である。さらに、進化を重視する哲学と同時に考えることで、人文学と社会科学にまたがった統一的な応用進化論を構想することができよう。

## [キーワード]

進化、心理、経済、経済史

## [エピソード]

コーエン (Tyler Cowen)：しかし生産性は低下しているんだ、多くの国で。当惑するよ。

ヘンリック (Joseph Henrich)：なぜ生産性が低下しているかって君はぼくに尋ねているんだね。

コーエン：そうなんだ。日本、米国、欧州ではみんな80年代以前から生産性上昇率が低下しているんだ。もちろん低下をインターネットのせいにはしていないんだが、インターネットはあんまり助けになっていないんだ。

ヘンリック：ぼくは文化進化論者だから、もうちょっと長い時間軸で見たいね。200年後にまた尋ねてくれ。

[Conversations with Tyler (December 14, 2016)]

## 1. 人類進化生物学とは

人類進化生物学とは、Human Evolutionary Biologyの直訳である。その特徴は生物学と社会科学の統合である。ここで言う社会科学には心理学、人類学、経済学、社会学、政治学、人文地理学などが含まれる。この人類進化生物学での重要命題は文化と遺伝子の共進化 (culture-gene coevolution) である。数百万年の間に起きる遺伝子の進化は文化の進化と影響し合いながら起きる。

第2章ではジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた』に基づいて、百万年単位での文化と遺伝子の共進化を説明する。これは人類史を考える時に重要な視点である。また、ニコラス・クリスタキス『ブループリント』に基づいて、その現代人への含意を考えよう。

次に、ここ二千年ぐらいの短い歴史を考えよう。ここでは遺伝子の進化は無いと考えてよい。では、進化は文化だけなのかというと、意識における心理の変化が重要である。そして、心理の変化と共に、特に生物学的には脳内部の変化が起きている。第3章ではジョセフ・ヘンリック『The WEIRDest People in the World』を元にこのことを理解しよう。ここでは、心理的要素が制度を支える重要な軸であることが議論される。第4章では、ここまでの議論をまとめ、統合的な人間界初の素描を示す。

遺伝子の進化⇔⇔文化の進化

百万年単位の変化

⇒⇒⇒心理・規範・政治・社会・経済の変化&生物学的な変化

宗教や農耕→社会

千年単位の変化

↓ ↓

心理 ←→ 制度

↘ ↓

→→ 心理

二百年単位の変化

⇒⇒⇒政治・社会・経済の変化&生物学的な変化

図 人間開発の素描

出所：ヘンリック（2019）と Henrich（2020）をもとに筆者作成。

更に、哲学と人類進化生物学との関係を考えよう。第5章ではデネット『心の進化を解明する』を取り上げて、進化論を重視している点で人類進化生物学と極めて整合性が高いことを議論する。

最後に、人類進化生物学の開発経済学に与える含意を議論する。第6章では結語としてグローバルイゼーションへの不満、構造改革の失敗、そして、プロスペクト理論の心理部分など人類進化生物学の視覚を得ることで分析が可能になる事象を素描する。

本章の残りでは、なぜこのような統一理論的視覚があると良いのかを議論しよう。現在、経済学においては心理学を取り入れた行動経済学という分野が定着し、重要な学問的貢献がいくつもなされている。例えば、大竹文雄他『医療現場の行動経済学－すれ違う医者と患者』が挙げられる。経営学においても心理学は重要な位置を占めている。入山章栄『世界標準の経営理論』においては三分の一が心理学による貢献に当てられている。しかしながら、これらの心理学の貢献は他の貢献と並置されており、有機的に統合して示されていない。それはアドホックかつ職人的な取扱いを要求することになる。素描であっても、統合的に示すことができれば、学問的手法の選択において一つの見通しを与えてくれることとなろう。本稿では人類進化生物学という視点を通して、統合的な素描を与える。

## 2 文化－遺伝子共進化：百万年単位の変化

本章ではまず、ジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた』に基づいて、数百万年単位での文化と遺伝子の共進化を説明する。これは人類史を考える時に重要な視点である。次に、ニコラス・クリスタキス『ブループリント』に基づいて、その現代人への含意を考えよう。

### 2.1 成功の秘訣

本節ではジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた』に基づいて、百万年単位での文化と遺伝子の共進化を説明する。

まず、重要なのはどのように文化と遺伝子の共進化が起きるかである。百万年以上前から人類の祖先たちはお互いに他者から学び、それを文化として蓄積していくようになった。このようなプロセスが何世代か続くうちに技術や習慣のツールキットが生まれた。こうした有用な技術や習慣が何世代にもわたって蓄積され、改良が重ねられていくと、文化習得に秀でた個人が自然選択において有利になった。そして、ヒトの脳や身体に遺伝的な変化をもたらした。これが文化－遺伝子共進化である（ヘンリック（2019）、p.11）。

そして、文化の進化が進むに連れて自己家畜化が起きていく。すなわち共同体で暮らせるように人間の文化が修正されていく。そして、文化の進化は共同体のもつ集団脳（集団的知性）を生み出した。人類の成功の秘密は、共同体のもつ集団脳（集団的知性）にある。集団脳はヒトの文化性と社会性が合わさって生まれたと考えられる（同上 p.25）。私たちがこうした道具、概念、技能、ヒューリスティクスなどを持っているのは、ヒトが賢い動物だからではない。因果関係は逆である。人は文化によって生み出された膨大な道具、概念、技能、ヒューリスティクスなどのおかげで賢くなっている（同上 p.27）。

そういう中で心理的な側面にも変化がおきてくる。『道徳感情論』のアダム・スミスやフリードリヒ・ハイエクが主張していたとおり、私たちに「正しい行ない」をさせて社会をうまく動かしているのは、無意識かつ反射的に働く規範心理であって、自己利益を追求する利己心でもなければ、先を見越した冷静で合理的な損得勘定でもない。ある社会がうまく機能するかどうかは、社会規範のパッケージ、すなわち広い意味での制度いかにかかっているのである（同上 p.293）。

もう少し詳述すると、長い歳月にわたって続いてきた集団間競争を駆動力とする文化進化によって、規範であふれた社会環境が生み出されていった。つまり、結婚、儀式、親族関係から、資源交換、金銭取引、共同体防衛に至るまで、ありとあらゆる分野が社会規範の影響を受け、名声や信望が重んじられる社会が誕生した。こうした社会環境が何万年、何十万年にもわたって強い選択圧として作用し続けた結果、ヒトの遺伝子に変化が生じ、ヒトの社会性が形成されていった。こうして生まれた高度の社会性と、他者から学ぶという文化的性質とがあいまって、高度な技術や適応的な知恵が蓄積されていった。こうしたプロセスの結果として生まれるのが、人類の集団的知性（集団脳）である（同上 p.314）。

集団脳は、遺伝的進化がまったく起こらなかったとしても、個々人をより賢くしてくれる。規模が大きく、成員同士の結びつきの強い集団からは、より多くの道具、より豊かな知識、より高度な

技術が生まれてくる（同上 p.340）。言語は長期にわたる累積的文化進化の産物である（同上 p.344）。ここでは、二つの重要な共進化が進行していた。第一に、複雑度を増すコミュニケーションレパートリーと、複雑度を増す道具、習慣、制度との共進化である。第二に、コミュニケーションレパートリーが文化的に蓄積されていくにつれて、コミュニケーションに関わる諸々の遺伝子に選択圧がかかり、ヒトの心身にさまざまな変化が生じた（同上 p.373）。ただし、気をつけなければならないことは、これまでの研究では言語を重視すぎる問題点がある。従来の見解では言語の出現が、ヒトと他の動物と一線を画す境界線である（同上 p.381）。コミュニケーションを集団脳や規範と共に包括的に見る必要がある。例えば、「嘘をついてはいけない」「人を騙してはいけない」という社会規範が文化として芽ばえ、社会に根づいた後であれば、言語によって協力行動や交換取引が拡大していく（同上 p.383）。

さらに、遺伝的ではない生物的な変化も起きるようになる。例えば、文字を読む学習をすることによって異なる脳を持つようになる。これは生物学的へ変化であり、遺伝的な変化ではない（同上 p.388）。すなわち、文化的に構築された環境のなかで成長することによって、発達過程を通して非遺伝的に、ヒトの身体や脳が形成されていく（同上 p.391）。

このような百万年単位の変化はどのような示唆を社会科学におこなうのだろうか。人々の選好や嗜好は、他者の嗜好や選好を観察したり推察したりすることによって強く影響を受けることが重要である（同上 p.396）。選択は文化の中でおこなわれるのだ。これは諸文化でおこなわれた独裁者ゲームや最後通告ゲームなどのゲーム理論の実証分析でも明らかになっている。このことから、人間の生の営みについて、さらに理解を深めていくためには、ヒトの心理、生理、文化、歴史、そして遺伝子の間の、多様な相互作用と共進化に焦点を当てた進化学が必要だということがわかる（同上 p.488）。このように数百万年単位で人類は文化-遺伝子共進化を遂げ、180 万年前にはついにヒトは境界線を越えたようだというのが当面の研究結果である（同上 p.427、436）。

以上のような整理から、人類の発展に豊かな文化的な側面があることが理解できる。人類史の理解には文化-遺伝子共進化の理解が必要不可欠であろう。次節では、文化-遺伝子共進化によって我々人類にどのような遺伝子が組み込まれたのかに関するクリスタスキスの見解を紹介することにしよう。

## 2.2 ブループリント

ニコラス・クリスタキスは医師でありネットワーク研究もおこなう社会学者でもある。Covid-19 への感染対策についても示唆に富む op-ed を書いている<sup>1</sup>。彼が書いたブループリントは進化論的社会学の傑作と言ってよい。

最初に、航海記を探って、太平洋での漂流と無人島での生還を丹念に書いている。すなわち、人間は集団を離れたときにどのように暮らしていけるか、そういう時に人間に元々備わった遺伝子の影響が現われてくるということだ。

要約すると、人間には八つの要素からなる social suite なるものが遺伝子で書いてあって、その進化が文化の進化と共進化して、人類史上では遺伝子が人間に良い社会を作るように仕向けているということを議論している。その八つの要素とは以下の通りである。第一に、個人的なアイデンティティをもつ能力であり、他人のアイデンティティを認識する能力（The capacity to have and

recognize individual identity) である。第二に、パートナーと子どもに向けられる愛 (Love for partners and offspring) である。第三に、友情 (Friendship) である。第四に、社会的なネットワーク (Social networks) である。第五には、協力 (Cooperation) である。第六は、自分の集団への選好 (Preference for one's own group (that is, "in-group bias")) である。第七は、階層構造への温和な傾向、すなわちある程度の平等主義 (Mild hierarchy (that is, relative egalitarianism)) である。第八は、社会的な学習と教育 (Social learning and teaching) である。

歴史を見ればいろいろの悲劇は起きてきたけれども、この進化によって人間に備わった八つの要素が作用して、百万年単位の人類史で考えれば良い方向に進んでいるという森を見る達観を述べている。このように長い歴史を通じて進化論と社会学が結びつきつつある。

### 3. 心理・制度の変化：千年単位の変化

ここ二千年ぐらいの短い歴史を考えよう。ここでは遺伝子の進化は無いと考えてよい。では、進化は文化だけなのかというと、意識における心理の変化が重要である。そして、心理の変化と共に、特に生物学的には脳内部の変化が起きている。本章ではジョセフ・ヘンリック『The WEIRD People in the World』を元にこのことを理解しよう。ここでは、心理的要素が制度を支える重要な軸であることが議論される。その結果、欧米では他の地域と異なった心理的な特徴が見られると議論している。しかし、心理学の実証研究では欧米の大学生が被験者であるため、このバイアスが見落とされてきたと述べている。

本書での重要な命題は、遺伝的な違いとは全く無関係に、文化は人を生物学的に変え、そして、制度が人を心理学的に変えるということである。そして、結果的に生じる心理と制度の変化が人類の歴史に民主主義や経済成長という大きな影響を与えてきたと論じている。それが欧米の勃興を説明するのだと議論している。信心、慣習、技術、社会規範、すなわち文化が脳・生物的特徴・心理を形成する。動機付け、心の特徴、意思決定バイアスにまで影響は広がっている。その意味で文化と心理を分けることができない。そして心理を生物学と分けることができない。文化は物理的に脳を組み替え、どう考えるかに影響を与える (Henrich (2020)、p.16)。

ヘンリックは欧州においては宗教が果たした役割が大事であると言う (同上、p.151)。西暦 500 年頃のカトリック教会による婚姻と家族に対する規制、具体的に言えば従兄弟従姉妹婚の禁止により、中世に親族を基本とした制度が崩れ、中世の欧州人は移動が自由になった。社会的な関係性を選べるようになったのである (同上、p.191)。すなわち、西暦 500 年頃の結婚と家族計画が血縁ベースの関係を減らし、心理を変える。1500 年頃までに一千年間にわたって影響をあたえたという (同上、p.231)。これに対して、アジア (中国とインド) では、気候とエコロジーが心理に影響している (同上、p.252)。

その後の制度的な変化には心理的な制度が大きく関わったという。例えば、非人格的な市場がうまく行くには市場規範が必要である (同上、p.293)。親族ベースの制度が潰れ、都市化が始まり、自由都市が形成される。自治も始まる。市場統合がおこなわれ、非人格的な信用が高まり、一層の交易や協力がおこなわれるようになる (同上、p.320)。

こうして、経済では会社が生まれ、政治では政党が生まれ、社会ではスポーツとスポーツクラブが生まれる。こうしてグループが生まれ、グループ間の競争がありながら、親族と離れたところで、他人を信用し他人を協力するようになっていく（同上、p.357）。

市場は意識や心理を変え、選択にも影響を及ぼす。例えば、市場関係が発達すると、行動経済学や心理学で言うような Endowment effect とされる「自分の所有物を過大に評価する効果」が発生することが確認され始めている（同上、p.388）。

更に、知識史にも影響は及んでいる。啓蒙時代の思想家は全て、長年の欧州の文化進化のプロセスの産物であると言えよう（同上、p.429）。また、経済成長において技術革新が重要であるが、この技術革新を説明するのに、社会変化と心理的な変化によって、多くの情報が社会ネットワークに広範に拡大したことが重要だ（同上、p.467）。そうやって、既存のものを結びつけて技術革新が起きたのである。

こうやってヘンリックは「西洋の勃興（Rise of the West）」を説明する。そして、その含意は明らかである。まず、欧米型の開発が非欧米国でうまくいくとアприオリに仮定するのは難しい。制度的な支えがないからである（同上、p.486）。また、グローバリゼーションの不満を理解するのも難しい。それは心理学的な現象であるからだ。ヘンリックは、西暦千年頃までの人類史はジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』で説明できるが、それ以降は、自分の議論があてはまると述べている。

#### 4. 経済学からの人類進化生物学の素描

これまでをまとめると次の図のようになる。重要な点は三点ある。第一に、時間軸である。百万年単位の変化では文化と遺伝子の共進化が重要な課題となる。千年単位では文化と心理の制度変化が重要になる。そこでは、非遺伝子的な生物適応はおこるが、遺伝子的な進化は起きない。第二、文化の進化では、心理と制度の重要性である。心理と制度の変化が産業革命の前、名誉革命やフランス革命の前に起きていて、後の時代の民主主義や技術革新による経済成長を準備していたという

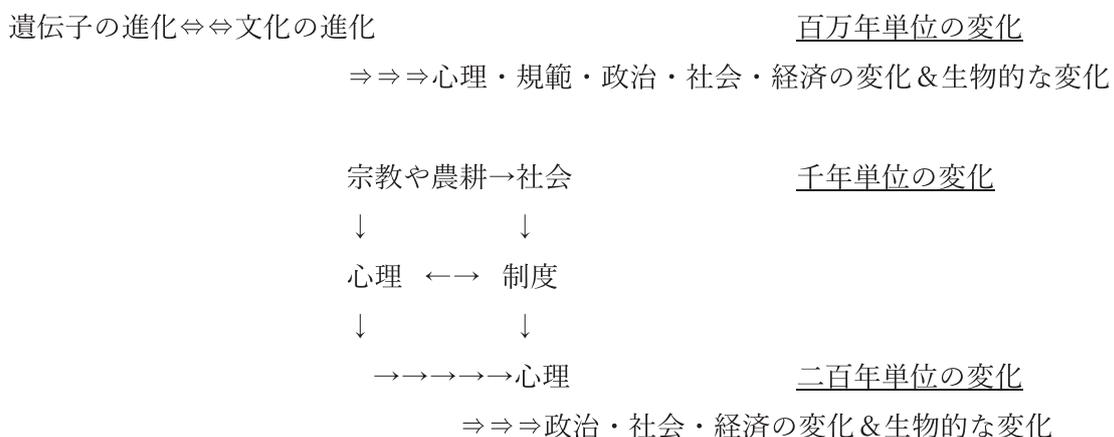


図 人間開発の素描

出所：ヘンリック（2019）と Henrich（2020）をもとに筆者作成。

のである。第三に、特に心理面での変化の重要性が大事である。経済学では経済成長の説明において、制度の重要性は強調されてきたが、これまでに心理面の影響をほとんど体系的に見てこなかったと言ってよい<sup>2</sup>。

経済における心理的な特徴は非体系的に議論されてきた。たとえば、アニマル・スピリットである。ケインズは1936年の著作『雇用・利子および貨幣の一般理論』でアニマル・スピリットを用いて企業の投資行動について議論した。しかし、それは理論的に十分に整理されてきたとは言えない。行動経済学においてはプロスペクト理論が有名であり、多くの実証実験でその妥当性が証明されている。しかし、なぜプロスペクト理論に見られるような損失回避が起きるのかはあまり体系的にも、そして歴史的にも説明されていないと言えよう。人類進化生物学を進めることで、心理的側面を体系的に経済学に戻すことができるのである<sup>3</sup>。

## 5. 人類進化生物学と進化論的哲学

さて、統合的な社会科学的な視覚が人類進化生物学によって素描されたところで、これは心や意識を扱う哲学とどのように切り結ぶのであろうか。進化を重視する哲学者として有名であるダニエル・デネットは近著『心の進化を解明する』で、なぜ人間が心をもつに至ったかを哲学的に議論している。そして、ヘンリック『The WEIRDest People in the World』に対して好意的な書評を書いている。本章ではまず『心の進化を解明する』を概説し、その上でデネットによるヘンリックの書評を紹介する。

デネットは心の進化を以下のようにまとめている。まず、我々は一方で物理学や化学など意識と無関係の科学をもち、他方で意識をもっているというところから議論を始めている。この二つはデカルト風に言えば二元論的に独立している。これを統合して理解するためにはダーウィンが解明したように進化のプロセス、すなわち、生物圏のすべてのデザインは、最終的には、盲目の、理解できない、自然淘汰の目的のないプロセスの産物であると理解するところを手がかりにした。すなわち、シロアリが造った城に見られるように、シロアリがそれを理解していなくても能力は発現する。また、チューリングが洞察したように、コンピュータがどのようにして情報を利用して、これまでは理解する人間の思考者のためのものとされていたタスクを達成するように設計することができる。すなわち、シロアリや自然淘汰そのものが示す「ボトムアップ」の設計プロセスと、「トップダウン」の知的設計プロセスとの区別が明確になった。

進化は多様で、その中にはよりダーウィンのものであるものもある。つまり、進化そのものも進化する。そして、いくつかのプロセスは脱ダーウィン化すると考えてもいい。こう考えると、トップダウン型の制御システムを持たない何十億ものニューロンからなる脳が、どのようにして人間型の頭脳に発展したのかという質問に戻ることができる。新しい環境の特徴である文化によって生み出された選択圧の下で、野生的なニューロンも含めて、自分自身を守るために装備されたニューロンによる分散型の制御がおこなわれた。

繁殖しようと努力する言葉やその他のミームは、共進化的な反応として脳の構造の修正などの適応を誘発する。文化的な伝達が我々の種の主要な行動革新として確保されると、それは神経構造の

重要な変化を引き起こしただけでなく、環境に新しさを加え、人間が「世の中の様々な“モノごと”を正確に整理するためのツール」を豊かにし、さらに、これらすべての新しい機会を追跡するための適応-思考ツールに有利な選択圧を提供した。

その結果として、文化の進化自体は、無方向の「ランダムな」探索から、より効果的なデザインプロセス、先見の明があり、目的意識があり、エージェント、すなわち知的デザイナーの理解力に依存したものへと進化していった。文化的進化は、それ自体が脱ダーウィン化し、意識を得たと言える。

つまり、我々は心に持つイメージを、特別な種類の人工物として見ることができる。一部は遺伝的に設計され、一部は文化的に設計された、時間に追われた生物が生活の中で巧妙に移動するのを支援するための特に効果的なユーザー・イリュージョンとして考えられる。その結果、我々は脳の表象的な活動によって構成されていないユーザー・イリュージョンとしての人間の意識を感じることができるのだ。

人間の心は、どんなに知的で理解力があっても、想像できる認知システムの中では最も強力なものではない。進化はあなたよりも賢い。私たちの現在の状態は、個人としても社会としても、不完全であると言える。私たちの心によるトップダウン型の推論能力と、私たちの動物としての脳のボトムアップの理解不能な才能の間には共依存性がある。

このようにデネットの議論を後追いしていくと、これまでに述べた人類進化生物学と極めて親縁性が高いことが感じられる。第一に、進化論が基本になっている。第二に、文化と遺伝子の共進化が想定されている。第三に、心が進化の結果として生まれている。このようにデネットとヘンリックを繋げることで一方に哲学、他方では統合された社会科学である人類進化生物学が連結され、おそらく哲学の先にある文学や舞台や芸術、すなわち人文学がさらに結合されていくと期待することができる。おそらくは、そこでは科学的なアプローチとストーリー（物語）は統合的に取り扱われることになる。「物語」は、デネットが言うように「私たちがそこで生きる世界のイメージ」（コンピュータで言えばデスクトップのようなもの、ハードウェアやプログラム言語で書かれたプログラムではなく、クリックできるフォルダーやアイコンが存在する場）であること、そして、このイメージが、私たちは一生を通じ時間の制約に追われ続ける生物として俊敏に動くことを支援してくれる、ということを示唆してくれる。このイメージ、つまり外見的イメージは、部分的には遺伝によってデザインされ、部分的には文化的にデザインされている。おそらく、文学や舞台や芸術が引き起こす感情も、一生を通じ時間の制約に追われ続ける生物として私たちが俊敏に動くことを支援してくれるのではないだろうか。

このように考えれば、ヘンリックの『The WEIRDest People in the World』に対して、デネットが好意的な書評を寄せたことも驚きはない。デネットは、本書はあらゆる点で敬意に値するが、冷徹な吟味を要求し、歴史家・経済学者・人類学者はこの冷徹な吟味という仕事に取り組めるか興味深いと結んでいる。

## 6. 結語

ここまで大風呂敷を広げたので、最後に人類進化生物学の開発経済学への含意を述べて終わろう。ここで開発経済学を欧米先進国以外も対象とした経済学と考えておこう。まずは二点が挙げられる。第一に、行動経済学に各地域の歴史を持ち込むということである。例えば、プロスペクト理論では人間は参照点からの損失に対して過敏に反応することが知られている。しかし、その損失への感情的反応は「恥」なのか、もしくは「罪」なのかで感情的な意味合いは変わってくると思われる。それは恥と関連した面子（めんつ）の問題なのか、自分の内なる基準への違反、すなわち失敗への恐怖なのかということである。それによって次の行動が変わってくることも考えられる。それこそが文学が描きだした一つの達成なのであろう。

第二、グローバリゼーションへの不満を考えるには当然ながら諸国民の心理を考える必要がある。すなわち、人類進化生物学を欧米だけではなく、諸国について考える必要があるだろう。また、1980年代から各国で取り組まれてきた構造調整や構造改革がうまく行かなかったこと、その一方で1960年代から東アジアで日本・韓国・台湾・中国と継起的に高度経済成長が起きたことを理解するにも、単なる孔子思想がうまく働いたと考えるのではなく、人類進化生物学アプローチで思想・心理と制度を合わせて考察することが重要になると考えられる。

### 注

- 1 Nicholas Christakis, "How the Swiss Cheese Model Can Help Us Beat Covid-19" Wall Street Journal, Nov. 13, 2020.
- 2 この点で興味深いのは p.581 の注 7 において経済成長における制度の役割を議論したアセモグルとロビンソンに関して触れていることである (Henrich (2020))。
- 3 この点を十分に考察するには西山圭太、松尾豊、小林慶一郎『相対化する知性 人工知能が世界の見方をどう変えるのか』の検討を含めて別稿が必要と考えられる。

### 参考文献

- 入山章栄『世界標準の経営理論』ダイヤモンド社、2019年。
- 大竹文雄、平井 啓編著『医療現場の行動経済学－すれ違う医者と患者』東洋経済新報社、2018年。
- ニコラス・クリスタキス『ブループリント』NewsPicks パブリッシング、2020年（原著、Christakis, Nicholas A., *Blueprint: The Evolutionary Origins of a Good Society*, Little, Brown and Company, 2019）。
- デネット『心の進化を解明する』青土社、2018年（原著、Daniel C. Dennett, *From Bacteria to Bach and Back: The Evolution of Minds*, Penguin, 2018）。
- 西山圭太、松尾豊、小林慶一郎『相対化する知性 人工知能が世界の見方をどう変えるのか』日本評論社、2020年。
- ジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた』白揚社、2019年（原著、Joseph Henrich, *The Secret of Our Success*, Princeton University Press, 2016）。
- Nicholas Christakis, "How the Swiss Cheese Model Can Help Us Beat Covid-19" Wall Street Journal, Nov. 13, 2020.
- Daniel C. Dennett, "Why Are We in the West So Weird? A Theory" The New York Times, September 12, 2020

Saturday.

Joseph Henrich, *The WEIRDest People in the World*, Farrar, Straus and Giroux, 2020.

Conversations with Tyler (December 14, 2016, Talk with Joseph Henrich)

<https://conversationswithtyler.com/episodes/joseph-henrich/>

## An Economic Sketch of Human Evolutionary Biology

Yoshiaki HISAMATSU

### Summary

It has become important to consider evolution and psychology in the economy. Evolution cannot be ignored especially when considering economic history. The co-evolution of culture and genes is an important concept in this context. Dissatisfaction with globalization is a psychological aspect. Behavioral economics is a related field of economics and psychology. It is important to consider psychology in business as well. However, these issues are only juxtaposed and not presented in an organic and integrated way. Human evolutionary biology can offer an integrated view. Furthermore, by considering them in tandem with philosophy that emphasizes evolution, we can envision a unified applied theory of evolution that covers both humanities and the social sciences.